

## 草垣群島上ノ島の自然調査概要報告

桑水流淳二\*・森田康夫\*・廣森敏昭\*・坂下泰典\*\*・山元幸夫\*・中間 弘\*・溝口文男\*\*\*

The Outline of Survey on Nature at Kaminoshima (Kusagaki Islands), Western Part of Kagoshima Prefecture

Junji KUWAZURU, Yasuo MORITA, Toshiaki HIROMORI, Yasunori SAKASHITA,

Yukio YAMAMOTO, Hiromu NAKAMA and Fumio MIZOGUCHI

### はじめに

鹿児島県立博物館では平成13年度から5ヶ年計画で、「触れ見る知る自然資料収集整備事業」を実施している。その中で、本年度は草垣群島の資料収集を行った。草垣群島は川辺郡笠沙町に属し、遠隔地の無人島で上陸に適した場所も少ないため調査は困難で、これまで総合的な調査や資料収集はほとんど行われていない。

今回、10月10日～12日に草垣群島上ノ島での調査及び資料収集を計画した。しかし、当日は波浪が高く、テントなどの資材の積みおろしができず、調査のみのために10日、午後1時30分～4時30分の3時間ほど上ノ島に上陸した。調査は地質、植物、昆虫、貝類、鳥類の5分野で行われ、貝類については陸産貝類のみの調査を行った。この調査では、わずか3時間という短い時間であったため各分野とも調査は限られたものにならざるをえなく、そのため、この報告も草垣群島の自然の一部を示しているに過ぎない。今後、年間を通じた継続的な調査を行い、季節変化や経年変化を把握する必要がある。

草垣群島は笠沙町野間池から南西の方向約90kmの海上にあり（図1）、今回使用した瀬渡し船で約3時間ほどかかる。草垣群島の主な島は、北から上ノ島、中ノ島、下ノ島で、これらは約6kmにわたって北東-南西方向に配列している（図2）。唯一船着場のある上ノ島には灯台やヘリポートも設置されている。また、下ノ島では昭和14年から燐鉱石が採掘されていたが、戦後もまもなく閉山している。

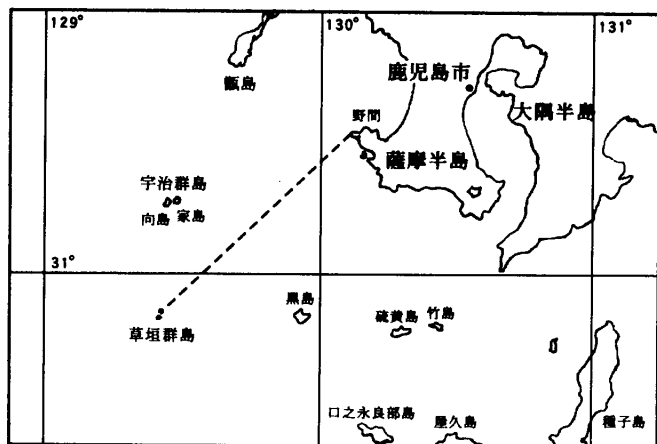


図1 草垣群島の位置

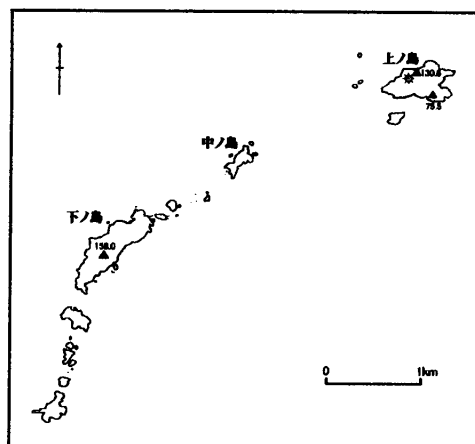


図2 草垣群島

\* 〒892-0853：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館

\*\* 〒890-0024：鹿児島市明和1-59-2

\*\*\* 〒899-0405：出水郡高尾野町下水流3164-7 高尾野町立下水流小学校

## はじめに

南九州地域における地質構造は、臼杵-八代構造線より西側は内帯、東側は外帯に区分されており、上ノ島を含む草垣群島はこの構造線の南方延長に位置する(図1)。

草垣群島の地質については、波多江(1956)による報告があるのみで、調査が非常に困難なため、詳細なことはよく分かっていない。波多江によれば、草垣群島の地質は主に南薩・枕崎周辺などに分布する南薩層群と同時期と思われる火山噴出物からなる。

今回の上ノ島の調査は、3時間ほどしか調査時間がなく、踏査できたのは船着き場付近や灯台に通ずる道路沿いの限られた範囲だけであった。

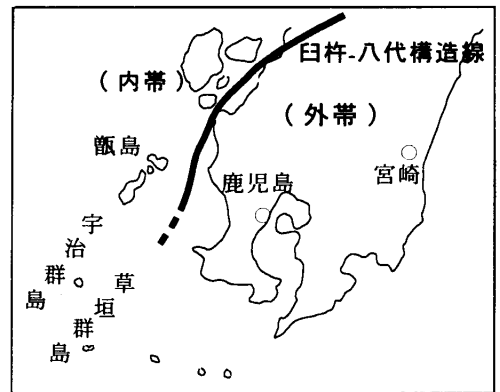


図1 南九州の地質構造図

## 1 地形・地質概要

上ノ島は南北約0.7km、東西約0.5kmで東西方向にわずかに長い島で、面積は約0.21km<sup>2</sup>である。島の西側に多くの小岩島があり、また南側には比較的大きい属島がある。

島の周囲はほぼ岩崖で囲まれており、北西海岸は高さ約100mほどのほぼ垂直な岩崖になっている。島内は灯台付近の標高130.6mを最高点とし、南東方向に傾いた比較的緩やかな丘陵地形を示している。島の東側には小規模な入り江があり、そこから北西方向に小沢ができ、少量ながら流水が認められる。

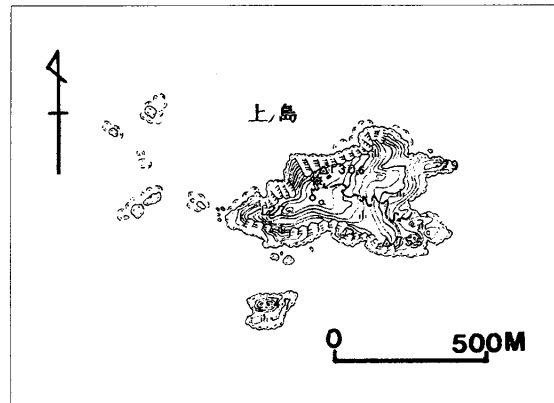


図2 上ノ島の地形図

国土地理院発行 2万5千分の  
1地形図「草垣群島」使用

島に分布する岩石は、安山岩質の溶岩と凝灰角礫岩である。溶岩は主に灯台に通ずる道路沿いでみられ、緑灰色～紫灰色をし、長石や角閃石の斑晶を多く含んでいる。凝灰角礫岩は船着き場付近でみられ、灰色の火山灰を基質とし、直径2cm～1mほどの安山岩質の亜角礫が混在している。これらの岩石は、全体的にやや変質をしている。

## 2 主な地質現象

地点①……船着き場付近では、安山岩質の凝灰角礫岩がみられ、基質は長石の白斑を多く含む火山灰で、直径2cm～1mほどの亜角礫が混在している。礫はほとんどが青灰色～紫灰色をした安山岩質の溶岩で、5mm～1cmほどの角閃石の斑晶がよく目立つ。この凝灰角礫岩の一部に直径1cm～3cmほどの角礫からなる火山礫凝灰岩や葉理の発達した

泥質な凝灰岩を挟む。これらの岩石は全体に弱い変質を受け、淡緑灰色を帯びている。

地点②……灯台に通ずる道路沿いには、1 mm～3 mmほどの白色をした長石の斑晶を多く含む安山岩質の溶岩がみられる。地表に近い部分は風化を受け、あたかもタマネギの皮をむくように表面が薄殻となって剥がれる。

地点③……灯台付近の道路沿いでは、長石の斑晶のほかに2 mm～5 mmほどの黒色をした角閃石の斑晶を含む安山岩質の溶岩がみられる。灯台より遠望する限りにおいて、この溶岩が島の北斜面にも分布しているようである。

地点④……丘陵地形を示す南西部にある尾根には、灰色をした安山岩質の溶岩がみられる。2 mm～4 mmほどの白色をした長石の斑晶を多く含み、多孔質である。この溶岩は直径1 m～4 mほどのほぼ球形をしている。これは、地点②でみられた玉ねぎ状構造の薄殻が剥がれ、中心部が残ってできたものと思われる。同様に北部にある尾根上でもみられ、ここでは岩盤が著しく風化し、赤黄色をした土壤になっているところもある。

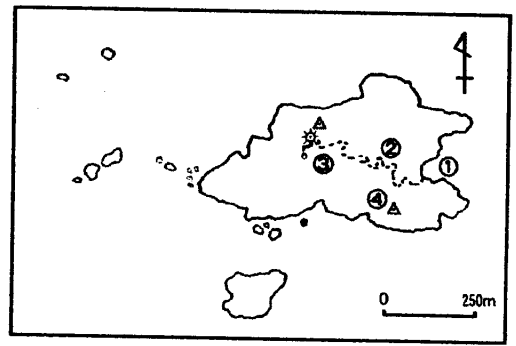


図3 調査地点図

### 3 まとめと今後の課題

上ノ島には安山岩質の溶岩と安山岩質凝灰角礫岩が分布している。安山岩質の溶岩は長石や角閃石の斑晶を多く含んでいる。安山岩質凝灰角礫岩は灰色の火山灰を基質とし、長径2 cm～1 mほどの安山岩質の垂角礫が混在している。これらの岩石は全体的にやや変質している。

今後、火山噴出物の噴出源や火山の活動時期を特定するために、安山岩質の溶岩などの岩石の組成分析や年代測定などを行う必要がある。また、中ノ島や下ノ島などにも同様の火山噴出物が広く分布している可能性があり、これらの岩石的特徴や地質構造を把握するなど、全島を総合的に調査する必要がある。

#### 引用・参考文献

波多江信広, 1956, 宇治群島及び草垣島の地質, 鹿大南方産業科学研究所報告, 1, 1-16.

## はじめに

草垣群島上ノ島の植物相については、1953年の5月に内藤喬氏等が上陸してシダ植物2種と種子植物56種の計58種を確認したのが最初の報告である。その後、1972年8月に鹿児島大学農学部の迫静男氏が同群島に生息するカツオドリ調査のため1週間滞在し、その際同島の植物相について詳しく調査した結果が報告されている。それによると、上ノ島で確認された高等植物は、シダ植物1種、種子植物70種（1亜種、10変種を含む）の合計71種とされている。

今回の調査は、波浪のためわずか3～4時間の滞在で、調査区域も頂上の灯台にいたる小道とその周辺に限られ、しかも灯台保守員による道の除草が行われたばかりで、路傍の小植物が多数失われており、十分な採集には至らなかったが、それでもシダ植物1種と種子植物32種の合計33種を確認し、そのうちハチジョウススキを除く32種を採集して標本とし、当博物館に収蔵した。

なお、採集した植物の同定については、当博物館学芸指導員の丸野勝敏も携わった。

## 1 植生の概要

上ノ島は、周囲約4 km、面積わずか0.21平方kmの小さな島で、周囲は断崖絶壁に囲まれており、最高点も130.6mと低く、宇治群島の家島や向島に比べると植生も単純である。

以下、植生の概要を述べる。

## (1) 海岸付近の植生

海岸は切り立った断崖となり、礫地や砂地は全く見られない。岩上にタイトゴメやソナレムグラ、コライシバ等が生え、岩の隙間などにハチジョウススキ、イソヤマテンツキ、ボタンボウフウなどが見られる程度で植生は貧弱である。

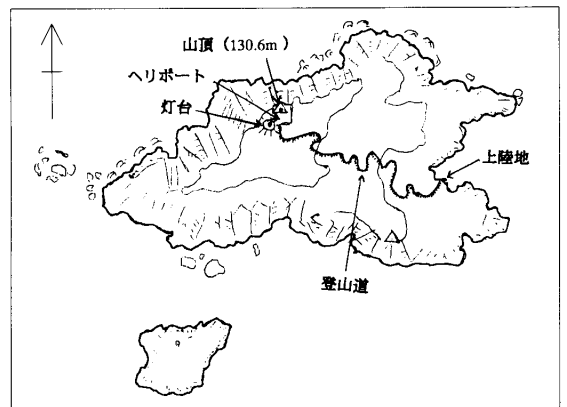
## (2) 斜面下部の草原

山頂から東側にかけてなだらかな斜面が続き、その下部はハチジョウススキが優占する草原となっている。ほかにニオウヤブマオやヒゲスゲ、ツルソバなどが目立ち、アマチャヅルなどつる性の植物も覆っている。

## (3) 斜面上部の低木林

斜面の上部や山頂付近には、樹高3～5 mほどのモクタチバナなどが優占する風衝低木林が発達している。今回は、時間の都合で樹林内の採集はできず、道沿いだけの採集となったため採集した種も限られている。

林縁にはクワ(ヤマグワ)が多く、10月にもかかわらず多くの実がついていた。また、オオムラサキシキブやイヌビワ、ハマビワが生え、ミヤコジマツヅラフジ等のツル植物も多い。路傍は草刈りが行われたばかりであったが、カタバミ、ツユクサ、イヌビエ、ツワブキ、



上ノ島概要図

オニヤブソテツ等を採集した。

(4) 山頂

山頂には灯台とその管理施設があり、緊急用のヘリポートも設置されているため植生はかなり損なわれている。ヨモギやハマヒルガオ等はここで採集した。

なお、灯台のある山頂の西側に低木林に覆われたもうひとつのピークがあるので、次回はこの一帯の調査・採集を行いたい。

2 草垣群島・上ノ島の植物目録

【● 採集した種, ○ 確認した種】

シダ植物 *Pteridophyta*

科名	和名	学名	採集・確認	備考
オシダ科	オニヤブソテツ	<i>Cyrtomium falcatum</i>	●	

[計 1科 1種]

被子植物 *Angiospermae* [双子葉類]

科名	和名	学名	採集・確認	備考
クワ科	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>	●	実
	クワ(ヤマグワ)	<i>Morus australis</i>	●	実
イラクサ科	ニオウヤブマオ	<i>Boehmeria gigantea</i>	●	花
タデ科	ツルソバ	<i>Persicaria chinensis</i>	●	花
	ギシギシ	<i>Rumex japonicus</i>	●	
ザクロソウ科	ツルナ	<i>Tetragonia tetragonoides</i>	●	
スベリヒユ科	スベリヒユ	<i>Portulaca oleracea</i>	●	
クスノキ科	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i>	●	花・実
	タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i>	●	
ツヅラフジ科	ミヤコジマツヅラフジ	<i>Pracylea insularis</i>	●	
ベンケイソウ科	タイトゴメ	<i>Sedum oryzifolium</i>	●	
バラ科	オオバライチゴ	<i>Rubus croceacanthus</i>	●	
カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>	●	花
モチノキ科	モチノキ	<i>Ilex integra</i>	●	実
ニシキギ科	モクレイシ	<i>Microtropis japonica</i>	●	
ウリ科	アマチャヅル	<i>Gynostemna pentaphylla</i>	●	
セリ科	ボタンボウフウ	<i>Peucedanum japonicum</i>	●	花
サクラソウ科	ハマボッサ	<i>Lysimachia mauritiana</i>	●	
アカネ科	ソナレムグラ	<i>Hedyotis biflora var. parvifolia</i>	●	花
ヒルガオ科	ハマヒルガオ	<i>Calystegia soldanella</i>	●	
クマツヅラ科	オオムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica var. luxurians</i>	●	実
スイカズラ科	ソクズ	<i>Sambucus chinensis</i>	●	花

科名	和名	学名	採集・確認	備考
キク科	ヨモギ	<i>Artemisia princeps</i>	●	
	オイランアザミ	<i>Cirsium spinosum</i>	●	花
	ツワブキ	<i>Farfugium japonicum</i>	●	

[計 20科 25種]

[単子葉類]

科名	和名	学名	採集・確認	備考
ツユクサ科	ツユクサ	<i>Commelina communis</i>	●	花
イネ科	ハチジョウススキ	<i>Miscanthus condensatus</i>	○	
	メヒシバ	<i>Digitaria ciliaris</i>	●	花
	イヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli var. caudata</i>	●	花
	コウライシバ	<i>Zoysia tenuifolia</i>	●	
カヤツリグサ科	ヒゲスゲ	<i>Carex oahuensis</i>	●	
	イソヤマテンツキ	<i>Fimbristylis ferruginea</i>	●	花

[計 3科 7種]

総計 24科 33種

おわりに

最初に述べたように、今回は滞在時間が短く路傍の除草などあっても、採集できた植物も限られていると考えられ、以前の記録と比べても新たな種は確認していない。さらに帰化植物等は、限られた狭い陸地においては定着や消滅を繰り返しており、過去に上陸した植物が必ずしも現時点で定着しているとは限らない。

今後、季節を変えて収集を行い、同島の植物相を明らかにするとともに、収蔵資料の充実を図りたい。

引用・参考文献

- 内藤 喬・新 敏夫・大野照好, 1956, II 草垣島. 南方産業科学研究所報告, 1, I, 33-36.  
 迫 静男, 1978, 草垣島の植物. 鹿児島島の植物. 鹿児島植物同好会会誌, 4, 8-13.

## はじめに

本年度の「触れ見る知る自然資料収集整備事業」で2002年10月10日～12日に鹿児島県笠沙町草垣島の上ノ島の昆虫調査をする予定であったが、波浪が高い等の影響で、結局10月10日の午後だけしか調査することができなかった。短い時間とはいえ、10種以上の昆虫が確認できたので記録しておく。

1 調査日時 2002年10月10日午後1時～4時

2 採集記録 (種名, 採集頭数等)

(1) トンボ目 **ODONATA** (2科3種)

〈ヤンマ科 **Aeschnidae**〉

ギンヤンマ *Anax parthenope julius* 目撃, 島で最高点の灯台近くで飛翔していた。

〈トンボ科 **Libellulidae**〉

ウスバキトンボ *Pantala flavescens* 1♂ 他にも灯台近くで10～20頭の群れで飛翔していた。

ハネビロトンボ *Tramea virginia* 1♂ ウスバキトンボの群れに1頭混ざっていた。

(2) バッタ目 **ORTHOPTERA** (2科2種)

〈オンブバッタ科 **Pyrgomorphidae**〉

オンブバッタ *Atractomorpha lata* 2♀ (緑型1, 褐色型1)

〈バッタ科 **Acricidae**〉

マダラバッタ *Aiolopus tamulus* 1♂

(3) カメムシ目 **HEMIPTERA** (1科1種)

〈ヘリカメムシ科 **Coreidae**〉

ホソハリカメムシ *Cletus punctiger* 1頭

(4) コウチュウ目 **COLEOPTERA** (2科2種)

〈コガネムシ科 **Scarabaeidae**〉

アオドウガネ *Anomala albopilosa albopilosa* 1頭 (破損個体補修)

灯台近くにおびただしい数のアオドウガネの破損個体が落ちていた。

たぶん夏, 灯台の灯火に飛来してきて死んだのであろう。

〈ハムシ科 **chrysomelidae**〉

ウリハムシ *Aulacophora femoralis* 1頭

(5) ハチ目 **HYMENOPTERA** (1科1種)

〈ツチバチ科 **Scoliidae**〉

ヒメハラナガツチバチ *Campsomeriella annulata annulata* 数頭目撃

(6) ハエ目 **DIPTERA** (1科1種)

〈ハナアブ科 Syrphidae〉

ナミホシヒラタアブ *Metasyrphus ferquens* 1頭

(7) チョウ目 LEPIDOPTERA (3科6種)

〈シジミチョウ科 Lycaenidae〉

ルリシジミ *Celastrina argiolus ladonides* 1♀

ウラナミシジミ *Lampides boeticus* 2♀

ヤマトシジミ *Zizeeria maha argia* 1♀

〈マダラチョウ科 Danaidae〉

アサギマダラ *Parantica sita nipponica* 飛翔目撃 (1頭のみ)

〈タテハチョウ科 Nymphalidae〉

ツماغロヒョウモン *Argyreus hyperbius hyperbius* 目撃 (1♀), 捕獲失敗

ヒメアカタテハ *Cynthia cardui* 1♂

### 3 結果の考察

- ・ 草垣群島上ノ島では、全部で12科16種の昆虫を確認できた。内訳は、トンボ目3種、バツタ目2種、カメムシ目1種、コウチュウ目2種、ハチ目1種、ハエ目1種、チョウ類6種であった。トンボのギンヤンマ、ウスバキトンボ、チョウのヤマトシジミ以外は全て草垣群島初記録種となる。
- ・ 全体的に小さい島で植物の種類も少ないせいも、昆虫の種類・数とも貧弱であった。

### 参 考 文 献

大長光純, 1981, 草垣島で採集した昆虫. SATSUMA, 33(91), 78.



## はじめに

県立博物館自然資料収集整備事業の一環として笠沙町草垣群島上ノ島総合調査が平成14(2002)年10月10日から2泊3日の予定で行われ、筆者は陸・淡水産貝類調査担当でこの調査に参加した。

## 1 日程と調査の概要

10月10日早朝出発とのことで9日夜、野間池に宿泊する。6時30分出港全員ライフジャケットを着用する。好天だがやや南よりの風があり波高1.5~2mの中を約20ノットで草垣を目指す。8時55分上陸予定地に到着。やや南東よりにかわった風向きと、満潮時間が重なり上陸地点は大きく波を被っている。影に待機しチャンスを待つがなかなか好転せず、上ノ島での野営を断念。野営を宇治群島家島に変更。上ノ島は本日の予定を調査採集だけに切り替え12時過ぎやっとなり上陸。集合時間を16時30分にきめそれぞれ調査採集にかかる。

上陸地点から130m上の灯台まで灯台保守点検用作業通路がコンクリート簡易舗装してあり、登り易いが急坂九十九折れである。ちょうど灯台保守の委託作業員が入島しており、通路両側の低木や草藪は刈り払い機で切り開いてあり、オオミズナギドリの営巣跡の穴がいたるところに口を開けている。通路沿いは樹木の茂っているところを含めほとんど乾燥しており、切り開かれた斜面には白化したタネガシマイマイ、チャイロマイマイの死殻が無数に散乱しており、これらの中から殻皮のついた比較的新しい殻を採集する。刈り払われた草木の切り株が新しく、樹液で湿った所や伐採して積重なった草木の下には生貝がおり、これらに手を出しているとなかなか頂上に進めない。

ここのタネガシマイマイは種子島や口永良部島のものと異なり殻が大きく、殻口が淡い桃紫色を呈し、殻色も褐色から薄い黄褐色があり別種ではないかと考え、帰ってから和歌山県の湊宏博士に生きた標本を送り同定してもらったが、やはりタネガシマイマイで、詳しくは日本貝類学会会誌「VENUS, Vol・43, No・3, (1984) タネガシマイマイの種内変異の研究: 富山清升」を参照するよう指示を受けた。

標高50m辺りでブッシュの中に入って見る、ヤマグワやイヌビワ、ニオウヤブマオウの木が低く枝を伸ばしている下を這って進む、やはりオオミズナギドリの営巣跡の穴が多く油断をすると穴に足を取られ転倒しかねない。2~3m入って落葉を取り除くとノミギセルが出て来た、キセルガイ類はクサカキノミギセルしか上ノ島からの記録はなくこれがそうなのだろう。場所によっては1平方メートルで20個体くらい採れ、たまにヤマタニシ、オカチョウジガイ、ヘソカドケマイマイが出るが数は少なく、しかも死殻が多い。とにかく一種でも多くと探すがなかなか種数が増えない。

頂上まで達し、金網のフェンスに囲まれた灯台の敷地を抜けた東側のブッシュの中も下と同じような状況で、フェンス南側の一角に放置してあったコンクリートブロックを4~5個取り上げ穴の中をのぞくとタネガシマイマイ、チャイロマイマイが両手一杯採れたが他の種は見当

たらず、クサカキノミギセルもない。登頂に時間をかけ過ぎたので他の場所を見る時間がない。北東側斜面の標高50m付近と西側標高120m付近は翌日調査することにし、登るときに入らなかったブッシュを選んで調査しながら下山し、都合13箇所ブッシュの中に入ったが結果は上記6種のみで、翌日調査する予定だった二地点はとんでもない誤算で結局は未調査の空振りに終わってしまった。

## 2 上ノ島産種と今回の採集記録及び上ノ島以外の分布地

1981年10月、鹿児島県が環境庁の委託で行った草垣群島の鳥類調査に参加した富山清升氏は、調査の合間に採集した陸産種8種を記録しており、この中のキセルガイ一種が湊宏氏により1982年日本貝類学会会誌「VENUS」に新種として発表され、クサカキノミギセルと和名が与えられている。

### 陸産種

#### ヤマタニシ科

ヤマタニシ *Cyclophorus herklotsi* martens, 1860

模式産地：長崎 分布：草垣上ノ島，本州関東以西

鹿児島県本土には普通に見られるが当島では少なく、老成した個体は見られなかった。

ケハダヤマトガイ *Japonia barbata* (Gould, 1859)

模式産地：奄美大島 分布：草垣上ノ島，奄美～沖縄，鹿児島市磯，寺山

県本土での産出も少なく今回の上ノ島では採れなかった。

#### ヘソカドガイ科

ヘソカドガイ *Paludinella japonica* (Pilsbry, 1901)

模式産地：高知県大月町柏島 分布：草垣上ノ島，本州以南

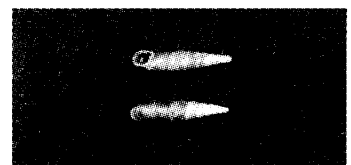
今回の上ノ島では採れなかった。

#### キセルガイ科

クサカキノミギセル *Hemizaptyx kusakakiensis* minato, 1982

模式産地：笠沙町草垣群島上ノ島 分布：草垣上ノ島

産出量から推測すると他の陸産種に比べ一番多産すると思われる。



クサカキノミギセル  
(S L. 9.8mm)

#### オカクチキレガイ科

オカチョウジガイ *Allopeas clavulinum kyotoense* (Pilsbry & Hirase, 1904)

模式産地：京都 分布：草垣上ノ島，宇治家島，向島，北海道以南

生貝，死殻ともに産出量は少なかった。

#### ナンバンマイマイ科

タネガシママイマイ *Satsuma* (*Satsuma*) *tanegashimae* (Pilsbry, 1901)

模式産地：種子島 分布：草垣上ノ島，宇治家島，向島，種子島，屋久島，大隅諸島，トカラ列島

死殻の産出量に比較して生貝はやや少なく、他の産地に比べ各個体の殻がやや大きい島嶼隔離的特徴が見られる。

#### オナジマイマイ科

ヘソカドケマイマイ *Aegista (Plectotropis) conomphala* Pilsbry & Hirase, 1903

模式産地：屋久島 分布：草垣上ノ島，宇治家島，向島，鹿児島市，開聞，坊津，種子島，  
屋久島，口永良部島，黒島，口之島，中之島

成殻は採れず，殻が薄質のせいか死殻の産出も少なかった。

チャイロマイマイ *Phaeohelix submandarina* (Pilsbry, 1890)

模式産地：琉球 分布：草垣上ノ島，宇治家島，向島，佐多岬，種子島，屋久島，口永  
良部島，黒島，トカラ列島，喜界島

生貝，死殻ともに産出量が多い。

以上 8 種が草垣群島上ノ島産として記録発表され，このうち 6 種が確認採集できた，中でもこの島固有種のクサカキノミギセルが最も多く産出すると推定できることには注目に値する。またこの島の東側，接岸地点のすぐ右側上部に真水がわずかながら染み出しており岩盤のくぼんだ数箇所小さな水たまりができています。淡水，汽水系の貝がいるのではと植物の生え際や岩の隙間，転石の下等を調べたが何も見いだせなかった。

#### 引用・参考文献

- 湊 宏，1982，宇治群島・草垣群島の陸産貝類相。VENUS 41 (2)，124-140。  
湊 宏，1988，日本陸産貝類総目録。日本陸産貝類総目録刊行会。  
湊 宏，1994，日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究。日本貝類学会。  
富山清升，1984，宇治群島向島の陸産貝類相。VENUS 43 (3)，199-210。  
富山清升，1984，タネガシマイマイ種内変異の研究。VENUS 43 (3)，211-227。  
肥後俊一・後藤 芳央，1993，日本及び周辺地域産軟体動物総目録。エル貝類出版局。  
東 正雄，1995，原色日本陸産貝類図鑑。保育社。  
行田義三，2002，宇治群島家島の自然調査概要報告（家島の陸・淡水産貝類相）。鹿児島県立博物館研究報告，第21号，19-25。

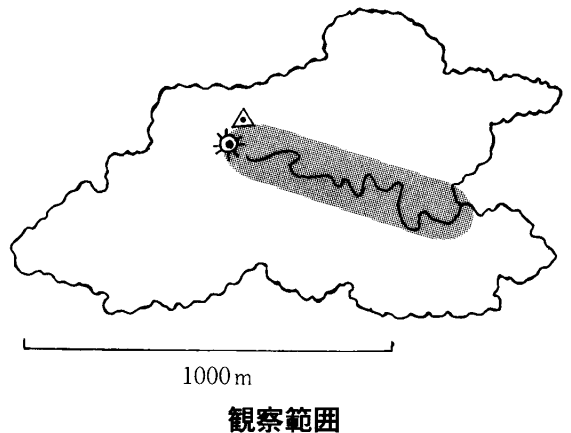
## はじめに

草垣群島はカツオドリ、オオミズナギドリの集団繁殖地として国設鳥獣保護区に指定されている。また、本群島は宇治群島とともに、九州本土と南西諸島を結ぶ鳥類の渡りの中継地としてもよく知られ、わが国ではめずらしい大陸系の種がしばしば観察されている所である。しかし、外洋に位置する無人島であるため、渡島が困難で十分な調査は行われていない。

今回は、当初、カツオドリ、オオミズナギドリの繁殖状況調査ならびに標識調査等も予定していたが、悪天候により10月10日午後1時～5時までの4時間程度しか滞在できなかったため、出現種の観察のみを行った。

## 1 観察地の概要

草垣群島上ノ島は、周囲約4km、最高点130mの周りを断崖絶壁に囲まれた小島である。海岸部は断崖になっており砂浜は見られない。断崖上部のハチジョウススキがまばらに生えているところは、カツオドリの営巣地となっている。山頂から東側にかけてはハチジョウススキが優占する比較的緩やかな斜面になっており、オオミズナギドリの巣穴が点在している。島内で水が存在するのはこの一帯だけであるが、斜面の所々からしみ出している程度にすぎない。斜面の上部から山頂部にかけては、モクタチバナやハマビワなどの照葉樹からなる風衝低木林が発達している。山頂には灯台と緊急用のヘリポートがあり、周りは草むらになっている。



## 2 出現種について

今回は、主に船付き場から山頂にいたる道沿いと、山頂部において観察を行い、14科27種を記録した(表1)。草垣群島では、これまで36科148種が記録されている(鮫島, 1998)。今回の出現種27種は全てこれに記載されており、初記録はなかった。出現種のうち、鹿児島県内で繁殖が確認されているのは、カツオドリ、アマサギ、コサギ、ミサゴ、トビ、サシバ、ハヤブサ、キジバト、ツバメ、イワツバメ、イソヒヨドリ、ウグイス、サンコウチョウ、メジロ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシブトガラスの17種で、サシバ(夏鳥)、ツバメ(夏鳥)、サンコウチョウ(夏鳥)以外は留鳥として生息している種である。ほかの10種については、チゴハヤブサ、ショウドウツバメ、ツメナガセキレイ、マミジロタヒバリ、ノビタキ、コムクドリが旅鳥、ノスリ、チョウゲンボウ、ハクセキレイ(亜種ホオジロハクセキレイは旅鳥)、ジョウビタキが冬鳥である。これら27種のうち、草垣群島で繁殖が確認されているのはカツオドリだけで、それ

以外の種については不明である。島の自然環境からして、大部分が近辺から漂行してきたり、渡りの途中で立ち寄ったりしたものと考えられる。

**表1 出現種リスト (14科27種)**

**カツオドリ科 Family Sulidae**

カツオドリ *Sula leucogaster*

**サギ科 Family Ardeidae**

アマサギ *Bubulcus ibis*

コサギ *Egretta garzetta*

**タカ科 Family Accipitridae**

ミサゴ *Pandion haliaetus*

トビ *Milvus migrans*

ノスリ *Buteo buteo*

サシバ *Butastur indicus*

**ハヤブサ科 Family Falconidae**

ハヤブサ *Falco peregrinus*

チゴハヤブサ *Falco subbuteo*

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

**ハト科 Family Columbidae**

キジバト *Streptopelia orientalis*

**ツバメ科 Family Hirundinidae**

ショウドウツバメ *Riparia riparia*

ツバメ *Hirundo rustica*

イワツバメ *Delichon dasyopus*

**セキレイ科 Family Motacillidae**

ツメナガセキレイ *Motacilla flava*

ハクセキレイ *Motacilla alba*

ハクセキレイ *Motacilla alba lugens*

ホオジロハクセキレイ *Motacilla alba leucopsis*

マミジロタヒバリ *Anthus novaeseelandiae*

**ツグミ科 Family Turdidae**

ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus*

ノビタキ *Saxicola torquata*

イソヒヨドリ *Monticola solitarius*

**ウグイス科 Family Sylviidae**

ウグイス *Cettia diphone*

## カササギヒタキ科 Family Monarchidae

サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*

## メジロ科 Family Zosteropidae

メジロ *Zosterops erythropleurus*

## アトリ科 Family Fringillidae

カワラヒワ *Carduelis sinica*

## ムクドリ科 Family Sturnidae

コムクドリ *Sturnus philippensis*

ムクドリ *Sturnus cineraceus*

## カラス科 Family Corvidae

ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

今回の出現種の中で注目しておきたいのはハシブトガラスである。漂行によるものか定着しているものかは不明であるが、4羽を確認した。今後、生息数の推移によってはカツオドリやオオミズナギの繁殖に影響を与える可能性もある。

## おわりに

今回は、出現種を記録するのみに終わった。草垣群島の鳥類相を明らかにするには、年間を通じた継続的調査、特に繁殖期における生息調査が重要である。また、基礎資料として過去の記録を集約し、草垣群島の鳥類目録を作成する必要もある。これらについては、来年度以降に予定されている調査の課題として取り組みたい。

なお、本調査の後、平成14年10月14日～15日に環境省が実施した国設鳥獣保護区現地調査では、オオミズナギドリ、カツオドリ、アオツラカツオドリ、トビ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、キマユムシクイ、コサメビタキ、メジロ、アトリ、ハシブトガラスの13科17種が記録されている（未発表）。このうち、アオツラカツオドリとセグロセキレイは草垣群島初記録であることを付記しておく。

## 引用・参考文献

鹿児島県保健環境部環境管理課，1987，鹿児島県の野鳥．鹿児島県．

鮫島正道，1998，草垣島国設鳥獣保護区調査報告．鹿児島県環境技術協会．

所崎聡・山元幸夫，1999，鹿児島県産鳥類リスト．鹿児島県立博物館研究報告．第18号，21- 42．

## 草垣群島上ノ島の地形・地質



上ノ島全景（東側から望む）



亜角礫を含む凝灰角礫岩（P61の図3の地点①）



安山岩質溶岩からなる急崖（P61の図3の地点①）



安山岩質溶岩の玉ねぎ状風化（P61の図3の地点②）

## 草垣群島上ノ島の植物



東斜面下部のハチジョウススキ群落



東斜面上部の風衝低木林



海岸崖地の植生

草垣群島上ノ島の鳥類



カツオドリ



ミサゴ



ノスリ



ハヤブサ



チョウゲンボウ



ツメナガセキレイ



ハクセキレイ(亜種 ホオジロハクセキレイ)



ノビタキ